

個人特性が心理学科オリエンテーションに 対する態度に及ぼす影響（1）

——オリエンテーションに対する態度の基礎データ——

心理学科 佐久田祐子・奥田亮・川上正浩・坂田浩之

抄録：心理学科の学生が、新入生対象のオリエンテーションに対してどのような期待を持っているのか、また本年度オリエンテーションを実際に経験した一回生がそこで何を得たのか調査を行った。その結果、学生の抱いている期待や獲得感に関する基礎データと、それらを構成する下位要素がどのように体系づけられているかが明らかにされた。本結果は、新入生が何が求めているのか、どのような工夫を行えば新入生のその後の大学生活を効果的に方向付けることができるのかを示す、今後のオリエンテーション企画構成の指針となるものと思われる。

索引語：新入生対象オリエンテーション、学生生活、大学教育

問題と目的

大学教育が十全に実践されるためには、その初動時における体制の確立が重要である。新入生にとって大学での学習は、高校までのそれとは大きく異なるため、早い段階での方向付けが必要とされる。多くの大学において、こうした観点から、新入生に対して春期の時点で“オリエンテーション”あるいは“学外オリエンテーション”という企画が実施されている（藤田，2002）。

新入生に与えられる情報は、大学の事務を中心に行われる“ガイダンス”などと呼ばれる機会や、該当学部、該当学科などの単位で行われる、同じく“ガイダンス”と呼ばれる機会などを通じて与えられる。広義にはこのような企画自体も、学生のこれからの方向付けを行っていくという意味では“オリエンテーション”と呼ぶべきものである。しかしながら、その多くは大学側から、いわば“一方的に”情報が与えられる企画であり、大学生活の十分なオリエンテーションを行うことはままならない。このような観点から、多くの大学では、学外に出かけるなどの“企画”を含めた参加型の催しを、新入生に対する“オリエンテーション”として実施している。本研究ではこれ以降、このような学生参加型の企画としてのオリエンテーションを、狭義の“オリエンテーション”であると定義し、論を進めることとする。

広義のものにせよ狭義のものにせよ、オリエンテーションは学生にとって、今後の大学生活がいかなるものであるのか、いかなるものになりうるのかのイメージを抱くためには、きわめて重要な機会であると考えられる。逆に言えば、学生が、大学教育初動時の段階で、どのような機会を求めているのかを把握し、これに呼応する適切なオリエンテーションを実施していくことは、大学教育の十全な実践のためには不可欠であろう。

オリエンテーションは大学教育の初動時に、大学の側が学生に対して、大学の方向性あるいは教育の方向性を伝えるべき機会であり、これは学生にとっての機会であると同時に大学にとっての機会である。本来このような形で行われるべきオリエンテーションも新学期の最初の段階で行われるといった時期的な問題もあり、場当たりのものになりがちである。

オリエンテーションが効果的に機能するためには、その対象である新入生が、どのような特性、

たとえば personality 特性を持っているのか、オリエンテーションに対してどのような期待を持っているのかを把握し、こうした特性や期待に即してオリエンテーションを運営していくことが重要である。さらに言えば、ある形態でのオリエンテーション実施が常に最大の効果を挙げると考えるよりも、実際にオリエンテーションに参加する学生の個人特性によってその効果は変動すると考える方が自然である。

そして personality 特性を含めた個人特性と、オリエンテーションに対する期待との関係を吟味しておくことは、オリエンテーションの実施という実践的な目的を持つと同時に、心理特性研究としても価値のあるものとなる可能性を持っている。

こうした目的のため、本研究ではまず実際の新生が、オリエンテーションに対してどのような期待を持っているのか、また実際のオリエンテーションを経験し、どのような獲得があったと考えているのかを探る。

ここで、本研究の調査対象者と、一回生、二回生の対象者が実際に体験したオリエンテーションの概要について述べておく。オリエンテーションに対する態度は、広く心理学的な意味を持つものであるが、今回の調査の対象はあくまでも1つの大学の、特定のオリエンテーションを体験した学生である。こうした意味では本研究はケース研究的な意味合いを強く持つものであり、調査対象者の所属する大学の概要や具体的なオリエンテーションの概要について述べておくことは必須であると考えられるからである。

調査対象者は、筆者らが所属する大阪樟蔭女子大学人間科学部心理学科の一回生、二回生であった。大阪樟蔭女子大学人間科学部心理学科は、平成13年4月に新設された学部、学科であり、キャンパスには現在一回生と二回生しか存在しない。三回生以上の上回生が存在しないことは対象者におけるオリエンテーションの重要性を高める要因であると考えられる。なお大阪樟蔭女子大学は、附属校として樟蔭中学校、樟蔭高等学校を擁し中高大一貫教育を展開しているため、一定人数の内部進学者が存在する。

このような中で現在の二回生に対するオリエンテーションは、その準備の立ち上げが遅れたこともあり、対象者が一回生の10月に行われた。大阪樟蔭女子大学人間科学部では、各学生には、一回生の段階でアドバイザーと呼ばれる担当教員が設定され、通常各アドバイザーには15名程度の担当学生が割り当てられる。現在の二回生に対するオリエンテーションでは、水族館に出向き、ここでアドバイザーのグループ毎に水族館内を回る企画を立てた。

現在の一回生に対するオリエンテーションは、入学当初の4月に実施された。このオリエンテーションでは、学外に出かけることなく、講義用の大教室に、アドバイザーグループがまとまって座れるよう机を配置し、非言語的コミュニケーションを活性化させるゲーム（人間知恵の輪、人間いす）を行った。またグループ毎に茶話会という形で、ジュースやお菓子などを食べながら雑談を行った。企画の運営には二回生の有志が参加し、このオリエンテーション自体にも、二回生の有志が参加している。

本研究で扱われるデータは、上記のような1つのケースに関するものであり、質問紙もこうした実態に合わせて作成されたものである。

方 法

被験者

大阪樟蔭女子大学人間科学部心理学科に所属する一回生138名、二回生139名、計277名が調査に参加した。

調査実施時期

2002年5月、授業時間内に質問紙調査を実施した。特に一回生に対する調査は、後述の質問項目内容の特性を考慮し、4月に行われたオリエンテーションから時間が経過し過ぎることのない

よう、1ヶ月以内に実施した。また二回生に対する調査も、一回生との比較検討を行うということを考慮し、ほぼ同時期に実施した。

質問紙の構成と質問項目の作成

一回生に対しては、

- ① 学外オリエンテーション期待尺度 [E尺度] (17項目・5件法)
- ② 学生生活満足尺度 [S尺度] (10項目・5件法)
- ③ 本年度オリエンテーション獲得尺度 [G尺度] (26項目・5件法)

という内容から構成された質問紙を作成し実施した。二回生に対する質問紙は、一回生の質問紙から③G尺度を除外し、①E尺度の説明文を「入学して初めてのころにどのような企画を体験していれば良かったと思うか」という一回生当時を想定した問いにした他は、同じ内容で作られた(詳しい個々の尺度・質問項目については、付表1-3を参照)。

①のE尺度“学外オリエンテーション期待尺度”は、基本的には教員が学外オリエンテーションで提供し得るであろう企画内容をもとに、それらのいずれが学生の望むものであるか、即ち「学生が入学して初めの頃にどのような企画を体験すれば、後の大学生活にとって良いと考えているか」を測るために作成された。特に、オリエンテーションを学内で行なうか、学外で行なうか、それも宿泊を伴うかといった場所についての議論がこれまでなされており、これら「企画としてのオリエンテーション」を問う項目が含まれた。またオリエンテーション(方向づけ)という観点から、学生は、大学で4年間を過ごすためにどのような情報を得たいと考えているか、或いは学生生活の基盤としてどのような人との関係を求めているのか、について問う項目も入れた。

②S尺度“学生生活満足尺度”は、学生が学業や人間関係を含めて、どの程度今の学生生活に満足し充実していると感じているか、を測るために作成された。

③G尺度“本年度オリエンテーション獲得尺度”は、ある程度E尺度と内容を対応させつつ、本年度のオリエンテーションの企画内容を考慮にいれ反映させながら作成した。実際に一回生たちが、今年のオリエンテーションを体験してどのように感じ、何を得たと思っているかを知るために作られた。

以上、全ての質問内容は筆者ら4名が数回にわたって検討し、上述した点に留意しながら独自に作成したものである。

手続き

被験者には調査目的を説明し、了解を得た上で調査に参加してもらった。調査票は授業時間内に一斉に配布し、被験者にその場で記入してもらい回収した。その際、各被験者は各自のペースで質問紙に回答することが求められた。

結果と考察

1. 学年毎の学生生活満足尺度(S尺度)得点

S尺度の全10項目について、心理学科一回生、二回生の学年別平均得点およびSDを算出した。この結果を表1に示す。なお、得点が高いほどその項目を肯定する反応であったことを表す。

表1より、両学年共に「将来の進路について不安である」という項目に対する得点が最も高いことがわかる。すなわち、一回生、二回生共に進路に関する不安は高いということである。溝上(2001)によると、将来の見通しを積極的に求める傾向のある学生は調査対象全体の半数近くにのぼり、全体としても将来の見通しがいいことへの不安は多く見られるとしているが、これは本研究結果とも一致する見解である。

また両学年共に得点の低い項目は「大学で本当に親しい友人はいない」であった。このことが本年度オリエンテーションによるものなのか、もしくは内部生が高校時代からの親しい友人と共に進学してきており、そのような学生たちの回答に影響を受けているのかは判断できないが、い

表1 大学生生活に対する学年別満足度得点（5段階評定）

	一回生		二回生	
	Mean	SD	Mean	SD
学びたいことが大学で学べる。	3.17	0.91	3.49	0.92
心理学科の授業内容に満足している。	3.01	0.85	3.34	0.92
大学の授業が面白い。	2.99	0.86	3.28	1.01
学内の友人関係に満足している。	3.70	1.16	3.71	1.20
大学での交友関係はせまい。	3.52	1.17	3.45	1.12
大学で本当に親しい友人はいない。	2.03	1.22	2.06	1.33
大学での日々は充実している。	3.12	1.05	2.96	1.13
学生生活が楽しい。	3.47	1.04	3.39	1.13
これからの大学生生活の先が見えず不安である。	3.33	1.12	3.41	1.26
将来の進路について不安である。	4.04	1.02	4.38	0.91

ずれにしても半数以上の者が大学内に本当に親しい友人がいるという方向の回答をしていることがわかった。

一回生と二回生との得点差は、進路への不安以外では「大学の授業が面白い」など、学業への満足に関する項目が目立つ。これについては次項でE尺度とS尺度をあわせて因子分析し、その結果を踏まえて詳しく分析することとする。

2. オリエンテーション期待尺度（E尺度）、学生生活満足尺度（S尺度）の因子分析

調査対象者が、学生生活のどんな側面に満足あるいは不満・不安を抱き、またオリエンテーションに何を期待し期待しないのかということ、両者の関連も視野に入れつつ集約的・構造的に捉えるために、一回生、二回生ともに同じ項目で調査を行ったE尺度、S尺度に関して、両尺度の全項目を合わせた27項目を用いて因子分析を行った。因子の抽出には主成分法を用いた。因子数は固有値1以上の基準を設け、さらに因子の解釈可能性も考慮して5因子とした。そして、二つ以上の因子に対して.40以上の因子負荷量を示した項目を削除した結果、第1因子と第2因子に対して因子負荷量が.40以上であった「皆で遊ぶようなゲーム」が削除された。その上で、再度主成分法を用いて5因子を抽出した。プロマックス回転を行った結果の因子パターンを表2に示した。

第1因子には合計5項目が含まれ、「泊まりがけの旅行」や「遊園地などにでかけること」など、オリエンテーションを通常の授業とは違うことを行う一つの企画・イベントとして期待する態度を表す項目から構成されているため、「企画期待」因子と考えることができる。

第2因子には合計9項目が含まれ、「上回生（二回生や三回生）と親しくなる機会・きっかけ」や「学生生活とはどんなものか聞く機会・きっかけ」など、オリエンテーションの場を誰かと知り合う、あるいは何かを知る機会として期待する態度を表す項目から構成されているため、「機会期待」因子と考えることができる。

第3因子には合計4項目が含まれ、「大学の授業が面白い」や「心理学科の授業内容に満足している」など、大学生生活の学業面での満足度を示す項目から構成されているため、「学業満足度」因子と考えることができる。

第4因子には合計4項目が含まれ、「学内の友人関係に満足している」や「大学で本当に親しい友人はいない」など、大学生生活の交友面での満足度を表す項目から構成されているため、「交友満足度」因子と考えることができる。

第5因子には合計4項目が含まれ、「資格について知る機会・きっかけ」や「将来の進路について不安である」など、自分の将来に対する意識や不安の高まりを表す項目から構成されているため、「将来展望」因子と考えることができる。

表2 E尺度・S尺度の因子分析の結果(主成分法, プロマックス回転, 5因子解)

	第1 因子	第2 因子	第3 因子	第4 因子	第5 因子
第1因子:企画期待 ($\alpha=.850$)					
E16.泊まりがけの旅行.	.834	.032	-.020	.072	.010
E 2.遊園地などに出かけること.	.829	-.044	-.107	.092	.055
E14.大学ではないどこか他の場所への遠出.	.822	.007	.053	-.056	.065
E12.観光.	.819	-.026	-.041	.038	.087
E10.スポーツ.	.521	.148	-.033	.136	.026
第2因子:機会期待 ($\alpha=.803$)					
E 5.上回生(2回生や3回生)と親しくなる機会・きっかけ.	.022	.810	-.001	-.110	-.043
E 3.他の一回生と親しくなる機会・きっかけ.	.127	.735	-.103	-.135	-.181
E13.学生生活とはどんなものか聞く機会・きっかけ.	-.021	.646	-.008	.009	.074
E 1.大学の授業に関する情報を得る機会.	-.249	.581	-.139	.020	.177
E 6.大学の施設について知る機会・きっかけ.	-.261	.574	-.096	.121	.278
E11.上回生の参加.	.174	.560	.018	-.017	-.114
E 7.先生と親しくなる機会・きっかけ.	-.007	.553	.094	.104	.226
E17.できるだけ多くの人と親しくなる機会・きっかけ.	.335	.536	.136	-.203	-.076
E 4.特定の人と深くつきあえる機会・きっかけ.	.256	.438	-.056	-.117	.058
第3因子:学業満足度 ($\alpha=.788$)					
S 5.大学の授業が面白い.	.020	-.034	.906	-.134	.102
S 9.心理学科の授業内容に満足している.	-.050	-.129	.894	-.162	.096
S 1.学びたいことが大学で学べている.	-.107	-.013	.810	-.041	.051
S 6.大学での日々は充実している.	.022	.093	.519	.350	-.158
第4因子:交友満足度 ($\alpha=.725$)					
S 3.学内の友人関係に満足している.	.022	-.159	-.028	.781	.175
S 2.大学で本当に親しい友人はいない.	-.222	.153	.038	-.764	-.144
S 8.大学での交友関係はせまい.	.053	-.051	.231	-.730	.200
S10.学生生活が楽しい.	.074	.133	.375	.472	-.178
第5因子:将来展望 ($\alpha=.503$)					
E15.資格について知る機会・きっかけ.	-.009	.139	.099	.045	.674
S 4.将来の進路について不安である.	.199	-.100	.053	-.046	.638
E 8.就職について知る機会・きっかけ.	-.018	.225	.101	.181	.636
S 7.これからの大学生活の先が見えず不安である.	.122	-.114	-.185	-.245	.501

注1) 項目番号の前にEの付いた項目はオリエンテーション期待尺度の項目, Sの付いた項目は学生生活満足尺度の項目であることを表す。

注2) ()内はCronbachの α 係数

表3 E尺度・S尺度の因子相関行列

	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子
第1因子	—	.185	-.093	-.033	-.124
第2因子	.185	—	.316	.235	.107
第3因子	-.093	.316	—	.409	-.125
第4因子	-.033	.235	.409	—	-.070
第5因子	-.124	.107	-.125	-.070	—

また, 因子間相関は, 表3のようになった。第3因子“学業満足度”と第4因子“交友満足度”の間で比較強い相関($r=.409$)が見られた他, 第2因子“機会期待”と第3因子“学業満足度”の間($r=.316$), 第2因子“機会期待”と第4因子“交友満足度”の間($r=.235$)に弱い相関が見られた。

これら因子分析の結果からは以下のことが考察される。

まず、オリエンテーションに学生が何を期待するかということに関しては、第1因子“企画期待”と第2因子“機会期待”が抽出されたことから、オリエンテーションを内容の如何に関わらず一つの企画・イベントとして開かれることを期待する態度と、より内実に注目してオリエンテーションが誰かと知り合ったり、大学に関する様々な情報を得たりする機会として機能することを期待する態度の二つの方向性があることが考えられる。

第二に、学生生活への満足度としては、第3因子“学業満足度”と第4因子“交友満足度”が抽出されたことから、学生生活の満足度を評価する軸として、学業面に関する軸と交友面に関する軸が存在することが考えられる。これを感情面で捉えると、微妙な違いではあるが、それぞれ「充実している—充実していない」、「楽しい—楽しくない」と表現できるような次元があると言えるかもしれない。ただ、第3因子と第4因子の因子間に比較的強い相関が見られたことから、両者は全くの別物ではなく、結びつき関連しあったものであるということが推測される。

第三に、第5因子“将来展望”が抽出されたことは、学生の資格や就職に対する関心と自分の将来に対する不安が密接に結びついていることを示唆している。なお、削除された項目である「皆で遊ぶようなゲーム」は、第1因子に対しても、第2因子に対しても負荷量が高く、見方によっては、オリエンテーションで皆で遊ぶようなゲームを行うことは、オリエンテーションをイベントとして期待する人達に対しても、オリエンテーションを誰かと知り合ったり大学に関する情報を得たりする機会として期待する人達に対しても、期待に応えるところのある内容だと言えるだろう。

3. オリエンテーション期待尺度 (E尺度) ・学生生活満足尺度 (S尺度) の下位尺度得点の分析

第1因子に対して負荷量が.40以上の5項目によって、“企画期待”尺度を構成し、各被検者毎にこれら5項目の得点を合計し、“企画期待”得点とした。同様の手続きで、“機会期待”尺度(9項目)、“学業満足度”尺度(4項目)、“交友満足度”尺度(4項目)、“将来展望”尺度(4項目)を構成し、各被検者毎に“機会期待”得点、“学業満足度”得点、“交友満足度”得点、“将来展望”得点を算出した。その際、各尺度得点どうしの比較が容易になるように各得点を項目数で割った。

なお各尺度の内的整合性を調べるためにCronbachの α 係数を算出したところ、表2の通りであった。“企画期待”尺度、“機会期待”尺度、“学業満足度”尺度、“交友満足度”尺度に関しては、 α 係数が.70以上あったが、“将来展望”尺度に関しては、 $\alpha = .503$ と値が低めであった。これは、他の下位尺度がEまたはS尺度のみから構成されているのに対し、“将来展望”尺度はEおよびS尺度の混成尺度となっていることが α 係数を低くしている原因と思われる。結果の解釈においてこの点を注意する必要があるが、将来への関心と不安が1の因子としてまとまったことには意義があると考えられるため、そのまま分析に用いることとした。

また、これら5つの下位尺度得点の平均値と標準偏差を算出したところ、表4の通りであった。

表4 E尺度・S尺度の各下位尺度得点の平均値

	企画期待	機会期待	学業満足度	交友満足度	将来展望
平均	3.39 (.91)	4.02 (.56)	3.17 (.77)	3.16 (.48)	4.07 (.60)

()内の数値はSD

各下位尺度得点は、いずれも分布が高い値の方に偏っており、特に“機会期待”得点と“将来展望”得点でその傾向の強いことが示された。このことは、今回の調査対象となった一回生・二回生の学生達にとって、オリエンテーションという行事が、誰かと知り合ったり、何らかの情報を得たりする機会として期待される傾向があるということ、将来に対する不安や就職、資格といった将来につながる情報への期待が高いということを示唆している。

また、これら5つの得点の間の相関を調べるために、Pearsonの積率相関係数を算出したところ表5のようになった。

表5 E尺度・S尺度の各下位尺度得点間の相関

	企画期待	機会期待	学業満足度	交友満足度	将来展望
企画期待	—	.314**	-.130*	.083	.049
機会期待	.314**	—	.226**	.152*	.203**
学業満足度	-.130*	.226**	—	.397**	-.146*
交友満足度	.083	.152*	.397**	—	-.091
将来展望	.049	.203**	-.146*	-.091	—

* $p < .05$ ** $p < .01$

その結果、“学業満足度”と“交友満足度”の間 ($r = .397, p < .01$), “企画期待”と“機会期待”の間 ($r = .314, p < .01$), “機会期待”と“学業満足度”の間 ($r = .226, p < .01$), “機会期待”と“将来展望”の間 ($r = .203, p < .01$), “機会期待”と“交友満足度”の間 ($r = .152, p < .01$) に有意な正の相関が見られた。また、“学業満足度”と“将来展望”の間 ($r = -.146, p < .05$), “企画期待”と“学業満足度”の間 ($r = -.130, p < .05$) に有意な負の相関が見られた。

これらを見ると、有意な相関が見られたのは、どれも“機会期待”か“学業満足度”との関係においてであることが分かる。

まとめると、誰かと知り合ったり、何らかの情報を得たりする場としてオリエンテーションに期待する気持ちが強い人達は、一つの企画・イベントとしてのオリエンテーションに期待する気持ちも強く、学業においても、交友関係においても満足度は高く、将来に対する意識も強いと表現できる。反対に、オリエンテーションが誰かと知り合ったり、何らかの情報を得たりする場となることをあまり期待しない人は、企画としてもオリエンテーションにそれほど期待せず、学業においても、交友関係においても満足度は低く、将来に対する意識も低いと言える。ここからは、期待があるから満足もあるという関係が見えてくる。大学で生活する中で、いろいろなものが得られるはずだ、得たい、という期待の強い学生は、学業においても交友関係においても満足を感じることができるし、逆に得られている手応えがあるから大学に何かを期待することができるとも言える。一方、大学という場に対するコミット自体が低く、大学において満足させられるものがあることを諦めて、期待もしない学生の姿が浮かび上がってくる。

また、学業面での満足度の高い学生は、企画・イベントの一つとしてのオリエンテーションに対してはあまり惹かれず、むしろオリエンテーションが誰かと知り合ったり、何らかの情報を得たりする機会となることを期待する気持ちが強い。交友面での満足度も高い。現在に満足しているためか将来に対する不安は低い。逆に、学業面での満足度の低い学生は、交友面での満足度も低く、オリエンテーションは誰かと知り合ったり、何らかの情報を得たりする場としてよりも、一つの企画・イベントとして開かれることを期待し、将来に対する意識や不安は強い。

交友満足度と学業満足度の相関が高いという結果は、学業面での満足と交友面での満足は連動しており、大学が学生を満足させるためには、授業を分かりやすく面白くする工夫のみならず、同時に学生達の交友関係を充実させて学生生活を楽しくすることに目配りする必要があることを示唆している。近年の学生が対人関係形成を苦手とする傾向があることから（古沢, 2001）、学生の交友面への配慮は大学として取り組むべき新たな問題であると言える。

4. オリエンテーション期待尺度（E尺度）・学生生活満足尺度（S尺度）の下位尺度得点における学年差

オリエンテーションに対する期待や学生生活に対する満足度が、1年の学生生活を経験することによってどのように変化するかを調べるために、一回生と二回生それぞれのE尺度・S尺度

表6 学年毎のE尺度・S尺度の各得点の平均値

()内の数値はSD

	企画期待	機会期待	学業満足度	交友満足度	将来展望
1 回 生	3.51 (.92)	4.07 (.55)	3.08 (.71)	3.40 (.81)	3.96 (.60)
2 回 生	3.27 (.91)	3.99 (.56)	3.27 (.79)	3.40 (.87)	4.18 (.59)
t値	2.142*	1.227	2.187*	.011	3.021**

* $p < .05$ ** $p < .01$

の各下位尺度得点の平均値と標準偏差を算出し、さらにt検定を行いこれらの得点の学年差を調べた。その結果、表6の通りであった。

有意水準5%で、“企画期待” ($t_{(271)} = 2.142, p < .05$)、“学業満足度” ($t_{(271)} = 2.187, p < .05$)、“将来展望” ($t_{(268)} = 3.021, p < .01$)で有意差が見られ、“企画期待”では一回生の方が得点が高く、“学業満足度”と“将来展望”では二回生の方が得点が高かった。

一回生は企画を期待するのに対し、二回生はそれほど企画に惹かれないと言える。また、二回生において将来に対する意識や不安が高まるのは、二回生の方が卒業に近づいたためと考えられる。より多くの講義受講経験のある二回生の方が一回生よりも学業面での満足度が高いという結果は、大学が学生が満足できるような内容の授業を行っているという説明が成り立つだろう。また、一回生の授業が基礎トレーニングのような内容が多いのに対し、二回生になるとより専門の面白み・魅力を伝えるような内容の授業が多くなるからということも考えられる。

5. 本年度オリエンテーション獲得尺度 (G尺度) の因子分析

一回生の被験者が、本年度実施されたオリエンテーションからどのようなことが獲得できたのか、あるいは物足りなかったのはどのようなことなのか、こういった獲得感の背景にある構造を理解するためにG尺度の因子分析を行った。なお、この分析には二回生のデータは入っていない。

G尺度に含まれる全26項目を用いて因子分析を行った。因子の抽出には最小二乗法を用い、軸の回転にはプロマックス法を用いた。因子数は固有値1以上とし、さらに固有値の落差および解釈可能性から5因子解を採用した。どの因子にも因子負荷量が.35に満たない項目を省き、23項目で再度最小二乗法、プロマックス回転の因子分析を行った。その結果得られた因子パターンと α 信頼性係数を表7に示す。

第1因子には合計7項目が含まれ、「他の一回生と親しくなれた」「友人関係の輪が広がった」などの、同級生とのつながりに関する項目から構成されている。従って、第1因子は“一回生との親密化”因子と考えることができる。

第2因子には合計5項目が含まれ、「人間知恵の輪が楽しかった」などの、オリエンテーションで実施した企画の充実感に関わる項目から構成されている。従って、第2因子は“企画充実感”因子と考えることができる。

第3因子には合計4項目が含まれ、「授業について情報を得た」などの情報獲得に関する項目、また「二回生との会話が今後の役に立った」などの二回生との会話から得られるものに関する項目から構成されている。従って、第3因子は“上回生からの情報獲得”因子と考えることができる。

第4因子には合計3項目が含まれ、「先生との会話が楽しかった」などの、先生とのつながりに関する項目から構成されている。従って第4因子は“教員との関係”因子と考えることができる。

第5因子には合計4項目が含まれ、「大学の施設についての情報を得た」「資格についての情報を得た」などの項目から構成されている。今回のオリエンテーションが、一回生同士あるいは上回生や教員とのコミュニケーションを深めるための橋渡しの役割を担うように企画された内容が中心であったことから、これらの情報を獲得するのは困難であったと考えられる。また、この因

表7 G尺度の因子分析結果(最小二乗法, プロマックス回転, 5因子解)

	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子
第1因子:一回生との親密化 ($\alpha=.786$)					
G11 他の一回生と親しくなれた	.914	-.064	.059	.115	-.076
G10 友人関係の輪が広がった	.912	-.047	.106	.016	-.032
G 1 他の一回生との会話が今後に役立った	.838	-.026	.084	-.204	-.008
G 4 多くの人と親しくなれた	.837	.061	.033	-.185	.096
G 7 他の人とのコミュニケーションがとれた	.747	-.013	-.032	.157	-.021
G 6 他の一回生との会話が楽しかった	.640	.165	-.078	.199	-.015
G24 会話に困った	-.362	.003	.103	-.322	-.004
第2因子:企画充実感 ($\alpha=.820$)					
G 2 人間知恵の輪が楽しかった	-.088	.891	.003	-.044	-.024
G 3 楽しかった	.308	.774	-.017	-.166	-.080
G18 有意義だった	.010	.755	-.003	.178	-.032
G20 人間椅子が楽しかった	.072	.615	.054	-.055	-.015
G17 心理学科の雰囲気を感じられた	-.125	.453	.010	.138	.255
第3因子:上回生からの情報獲 ($\alpha=.833$)					
G14 授業について情報を得た	.013	-.056	.894	-.136	.049
G16 二回生との会話が今後の役に立った	.077	.055	.725	.086	.010
G15 学生生活について情報を得た	.082	.032	.679	.079	.034
G12 二回生との会話が楽しかった	-.003	.187	.398	.329	.013
第4因子:教員との関係 ($\alpha=.831$)					
G13 先生との会話が楽しかった	-.061	-.030	.060	.969	-.147
G19先生との会話が今後のために役立った	-.119	.138	.042	.755	.083
G5 先生と親しくなれた	.274	-.198	-.124	.728	.104
第5因子:獲得困難 ($\alpha=.674$)					
G23 大学の施設について情報を得た	.004	-.137	.182	.031	.782
G26 資格について情報を得た	-.078	-.081	.023	-.044	.745
G 9 就職についての情報を得た	-.035	.123	.062	-.014	.544
G25 特定の人と深く付き合えるようになった	.269	.165	-.286	-.019	.540

注1) () 内は Cronbach の α 係数

表8 G尺度の因子相関行列

	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子
第1因子	—	.634	.352	.578	.215
第2因子	.634	—	.401	.539	.112
第3因子	.352	.401	—	.534	.347
第4因子	.578	.539	.534	—	.418
第5因子	.215	.112	.347	.418	—

子には「特定の人と深く付き合えるようになった」という項目も含まれている。企画中、アドバイザーグループのまとまりだけにとどまることなく、茶話会企画ではくじによってアドバイザーグループとは全く別の新たなグループを作り、できる限り多くの同回生、上回生、教員とのコミュニケーションがとれるような工夫を行った。これは、新入生の交友関係を最初から特定させてしまうことのないよう配慮したためである。すなわち特定の人ばかりと親しく付き合うということは今回の企画の趣旨と一致しないものであるため、「特定の人と深く付き合えるようになった」という項目も実現困難であったと思われる。従って第5因子は“獲得困難”因子と考えることができる。

各因子の α 係数は、第5因子を除く全てにおいて.75以上になっているため(表7)、これら4

因子の内的整合性は確認された。第5因子の α 係数が.674と低めに出ているのは、前述の通り、獲得困難であった情報および実現困難であったコミュニケーションに関する項目が一つにまとめられたことに起因するであろう。

また、因子間相関は表8のようになった。第1因子と第2因子の間 ($r=.634$)、第1因子と第4因子の間 ($r=.578$)、第2因子と第4因子の間 ($r=.539$)、第3因子と第4因子の間 ($r=.534$)、第4因子と第5因子の間 ($r=.418$) にそれぞれ強い正の相関が見られた。

これらの結果によって、本年度オリエンテーションで一回生が得たものや得られなかったもの、言い換えれば我々がオリエンテーションを通じて一回生に与えた方向性の構造が浮かび上がってきた。

第一に、人間関係という点で共通する各項目、すなわち一回生との関係を表す項目、上回生との関係を表す項目、教員との関係を表す項目が、それぞれ別の因子として抽出された。これは同回生と親しくなることと、上回生および教員と親しい関係を築き上げることとはそれぞれ異なる軸にあることを意味する。しかしながら三者の因子相関は非常に高く、背景に人間関係をうまく形成するためのスキルの存在が推測できる。

第二に、“企画充実感”因子と、“獲得困難”以外の3因子間に強い正の相関が見られたことから、企画内容と人間関係形成との関連が見出された。企画の充実感が人間関係形成に一役を担うのか、良い人間関係が形成されることによって企画充実感が増すのか、あるいは双方向なのか、両者の関係の向きは定かではないが、少なくともオリエンテーションの企画内容を充実させることの意義は確認されたと言えよう。

第三に、情報獲得に関する項目と、二回生との関係に関する項目が“上回生からの情報獲得”因子として1つにまとまった。これは授業や学生生活に関する情報が、上回生から得られやすいということの意味している。従って、オリエンテーションの運営を上回生スタッフ中心に進めることは、一回生に様々な情報を提供しやすい状況作りにもなると考えられる。

第四に、“教員との関係”因子と“獲得困難”因子との相関が強かったことから、今回のオリエンテーションにおいて教員との関係を築くことがあまり容易ではなかったと推察される。教員1名に対して、その教員をアドバイザーとする一回生は10数名おり、教員に限られた時間内で各一回生と満遍なく会話の機会を持つとすると、広くて浅い関係しか築くことができないのは当然のことかもしれない。

6. 本年度オリエンテーション獲得尺度 (G尺度) の下位尺度得点の分析

それぞれの因子に対して負荷量が.35以上を示す項目で下位尺度を構成し、被験者毎に下位尺度得点の合計を算出し、さらに各尺度得点どうしの比較が容易になるように各得点を項目数で割った。各下位尺度得点の平均値および標準偏差は表9の通りである。

表9 G尺度の各下位尺度得点の平均値

	一回生との親密化	企画充実感	上回生からの 情報獲得	教員との関係	獲得困難
平均	3.05 (.94)	3.24 (.86)	2.97 (.89)	2.88 (.91)	2.05 (.65)

() 内の数値は SD

表9より、分布が高い値の方に偏っている下位尺度は“企画充実感”および“一回生との親密化”であり、逆に低い値に偏っているのは“獲得困難”および“教員との関係”である。このことから、今回の新入生オリエンテーションで行った企画は一回生にとって充実したものであり、同回生との親密化をはかる場になったと言えそうである。

次に、5つの下位尺度得点間の相関を調べたものが表10である。

その結果、全ての組み合わせにおいて有意な正の相関が見られた。これらの因子は同回生との

表10 G尺度の下位尺度得点間の相関

	一回生との 親密化	企画充実感	上回生からの 情報獲得	教員との関係	獲得困難
一回生との親密化	—	.584**	.406**	.494**	.238**
企画充実感	.584**	—	.439**	.474**	.186*
上回生からの情報獲得	.406**	.439**	—	.528**	.311**
教員との関係	.494**	.474**	.528**	—	.389**
獲得困難	.238**	.186*	.311**	.389**	—

* $p < .05$ ** $p < .01$

関係形成であったり、企画充実感であったりと、その内容は異なるものの、それぞれ関連していることがわかった。これはオリエンテーションに対して全体的に肯定的な評価を行った者と、全体的に否定的な評価を行った者とに分かれていることを意味する。この背景を明らかにするためには、オリエンテーションに対する評価と関連する個人的要因、特に personality との関連を検討する必要があると思われる。

7. まとめと今後の課題

本研究から、学生がオリエンテーションに求める期待がどのようなものなのか、本年度オリエンテーションにおいて一回生がどのような獲得感を抱いたのかといった基礎データが得られ、それらの下位要素がどのように体系づけられているかが明らかにされた。

G尺度の因子分析結果より、今回のオリエンテーションで提供しなかった情報の獲得に関する項目、及びオリエンテーション内容からは実現困難であったと思われる項目が“獲得困難”因子として1つにまとまったが、E・S尺度の因子分析結果から得られた“将来展望”因子の平均下位尺度得点が高かったこと、すなわち将来に関する不安が高く、資格や就職に関する情報が求められていることから、今回の企画は一回生にとって必ずしも完全に満足の行くものだったわけではないと言える。しかしながら、オリエンテーションによって幅の広げられた人間関係が、大学生活全般、ひいては将来に関する不安を払拭するための情報を得るパイプとなることは間違いないただろう。

本研究結果は、学生の期待に応え、かつ効果的な方向付けの場としてオリエンテーションをうまく働かせるための企画構成に役立つと思われる。本研究はケース研究であるため、今回得られた結果をどこまで大学全般に広げることができるか検討することを今後の課題とする。

注

- 1 二回生は、一部がスタッフとして本年度のオリエンテーションにも参加したが、多くは体験していないため、③の内容は除外した。

引用文献

- 藤田哲也 2002 大学基礎講座 北大路書房
 古沢由紀子 2001 大学サバイバル 集英社新書
 溝上慎一 2001 大学生の自己と生き方—大学生固有の意味世界に迫る大学生心理学— ナカニシヤ出版

付表1 学外オリエンテーション期待尺度 (E尺度) の項目

1. 大学の授業に関する情報を得る機会。
2. 遊園地などに出かけること。
3. 他の一回生と親しくなる機会・きっかけ。
4. 特定の人と深くつきあえる機会・きっかけ。
5. 上回生 (2回生や3回生) と親しくなる機会・きっかけ。
6. 大学の施設について知る機会・きっかけ。
7. 先生と親しくなる機会・きっかけ。
8. 卒業後の就職について聞く機会・きっかけ。
9. 皆で遊ぶようなゲーム。
10. スポーツ。
11. 上回生 (2回生や3回生) の参加。
12. 観光。
13. 学生生活とはどんなものか聞く機会・きっかけ。
14. 大学ではないどこか他の場所への遠出。
15. 取得可能な資格についての情報を得る機会・きっかけ。
16. 泊まりがけの旅行。
17. できるだけ多くの人と親しくなる機会・きっかけ。

付表2 学生生活満足尺度 (S尺度) の項目

1. 学びたいことが大学で学べている。
2. 大学で本当に親しい友人はいない。
3. 学内の友人関係に満足している。
4. 将来の進路について不安である。
5. 大学の授業が面白い。
6. 大学での日々は充実している。
7. これからの大学生生活の先が見えず不安である。
8. 大学での交友関係はせまい。
9. 心理学科の授業内容に満足している。
10. 学生生活が楽しい。

付表3 本年度オリエンテーション獲得尺度 (G尺度) の項目

1. 多くの人と親しくなれた。
2. ゲーム (人間知恵の輪) が楽しかった。
3. 楽しかった。
4. 他の一回生との会話が今後のために役立った。
5. 先生と親しくなれた。
6. 他の一回生との会話が楽しかった。
7. 他の人とのコミュニケーションがうまく取れた。
8. 上回生と親しくなれた。
9. 就職について情報を得た。
10. 友人関係の輪が広がった。
11. 他の一回生と親しくなれた。
12. 二回生との会話が楽しかった。
13. 先生との会話が楽しかった。
14. 授業について情報を得た。
15. 学生生活について情報を得た。
16. 二回生との会話が今後のために役立った。
17. 心理学科の雰囲気を感じられた。
18. 有意義だった。
19. 先生との会話が今後のために役立った。
20. ゲーム (人間イス) が楽しかった。
21. お菓子があって良かった。
22. 気詰まりだった。
23. 大学の施設について情報を得た。
24. 会話に困った。
25. 特定の人と深くつきあえるようになった。
26. 資格について情報を得た。

Some effects of personal traits on the attitude to the fresher orientation event (1)

—Basic data on the students' attitudes
to fresher orientation event—

*Yuko Sakuta · Akira Okuda ·
Masahiro Kawakami · Hiroyuki Sakata*

Abstract: The purpose of this study was to investigate the students' expectation to the fresher orientation event (FOE) and the gain they recognize to have got in their FOE experience. The results provided the basic statistics of students' expectation to FOE and the gain in FOE. The analysis showed the components and the structure of the attitude for FOE. The results of this study give us the hint how can we manage the suitable FOE for the better university life.

Keywords: fresher orientation event (FOE), student life, education in the university